



真田町日向畑遺跡

発掘調査報告書



真田町教育委員会

1973



(第1次調査)



(第2次調査)

ま え が き

日向畑遺跡報告書 序

この度、真田町角間の日向畑遺跡調査報告書が発刊される運びとなった。喜ばしいことである。

実は、昭和45年、町の文化財調査委員会が結成され、手始めとして町内の目ばしい文化財について調査した。松尾古城の調査に登る際、委員の久保達雄氏が案内を務め、当該地籍を通過の折「この畑の地下より古い墓石が発掘された。」との報告があり、畑の畔の墓石を指差し説明された。この際発掘調査を後日に期した。

昭和46年8月第1回の発掘調査をした処試掘が見事に適中して、地下に五輪塔・宝篋印塔などの墓石群が発掘され、関係者一同を狂喜させた。次いで、同年の9月重ねて残部の発掘調査をして一応全貌を調査し終えた次第である。さらに昭和47年5月、発掘遺跡周辺の土地を整備し現状に至っている。

本報告書に依ると、発掘された五輪塔及び宝篋印塔は完全な姿のものは見当たらないが、石塔の形態から年代の推定は、「南北朝時代を最古とし、室町時代から戦国時代に入る前後まで凡そ二百数十年間の墓であろう」とのことであり、被埋葬者に対する考察に於いては、「地方武士の真田氏においては推定する事ができない」とされている。

従来真田氏の発祥については確定的なものはなく、大別すると2つの説がある。その1つは、海野棟綱の2男が真田の庄に居住して、在名を以って真田氏と名乗ったのが始まりで、これが真田幸隆であるとする幸隆始祖説であり、もう1つは、真田の地には古くから真田氏を名乗る豪族が住んでいた。この豪族が海野棟綱の娘と嫁とり、生れたのが真田幸隆である。とする幸隆は真田氏中興の祖である。との説である。

色々調査研究された今日は後者の説が信憑性が高いとされつつある時だけに、此の度の調査報告書は、いよいよ後者の説を裏付ける貴重な資料となるであろう。元より今後の調査研究に依って説明せねばならない事もあろうが、本調査書が真田氏発祥研究の貴重な資料となる事は疑う余地のないものであろう。

それにしても、わが国の社会情勢が、経済界の急速な高度成長に伴って、物心両面に迫る公害が発生しつつあって、わが真田氏の共風を歎慕してやまない時、1回の試掘に依って本発掘が出来たのも、あながち偶然であろうか。

この度調査報告書の出版に当り、中心となって進められた小林幹男、川上元の両氏を始め地元の土地所有者との交渉、作業への協力、応援に率先された久保達雄氏及び関係各位に心から感謝の意を表したい。

昭和48年8月31日

清水 憲 雄

I 調査の経過

日向畑遺跡は、長野県小県郡真田町大字長字日向2586番地に所在する。ここは角間集落の入口松尾古城跡の南山麓で、一帯は真田氏の最初の居館跡と考証されるところである。かつて常福院と呼ばれる寺院があつたことが記録にみえる。今ここに安智羅明神、阿弥陀堂あるいはその周辺に多数の石塔群が散見、往時をしのばせている。

この堂宇に近接する西隅畑地から、五輪塔、宝篋印塔が出土し、古銭なども発見されたということ、土地所有者の倉島勇氏から、真田町教育委員会に連絡があつた。後日行なわれた町の文化財調査委員会の席上で、たまたま話がもちあがり、場合によつては発掘調査をしたらどうかという意見が強く、次回の委員会ではさつそく現地調査をした。その際、耕作の折にすでに発掘された五輪塔・宝篋印塔の各部が畑隅の石垣に置かれてあつた。これら石塔の形態からみて、当地方においては、かなり古くさか上るものと思われたし、またこの場所は前述のように真田氏の居館跡と考証される地域であつたし、場合によつては、今まで考古学的立場からあまり手がつけられなかつた、中世の墓制に関する新しい事例の検出と真田氏の発祥にかかわる何らかの手がかりがつかめるのではないかと考え、さつそく本遺跡を発掘調査すべく関係各所に手続きをした。

なお遺跡名は、土地の字名をとり日向畑（ひなたばたけ）と命名した。

発掘調査は、真田町教育委員会が町の文化財調査の一環として実施したもので、昭和46年8月22日から25日までの期間行つた。その結果、予想どおり五輪塔・宝篋印塔を基標とした中世墳墓跡の遺構群を検出した。しかし日程の関係上、一次では山の斜面下に続く遺構の西側部分を未確認のまま終了したため、同年9月14日から、16日までの8日間第二次調査を実施し、遺構のほぼ全容を実測調査することができた。短期間の発掘調査にもかかわらず多大な成果を得た。

ここに、その発掘調査の報告書を作成するにあたり、調査に終始ご協力いただいた

土地所有者ならびに地元角間のかたがたに心からなる敬意を表したい。また発掘調査にあつては、事務局である真田町教育委員会の諸氏、真田町文化財調査委員諸氏ならびに上田染谷丘高校歴史班の諸君、上小考古学研究会員、地元の調査参加者特に地元であり文化財調査委員でもある久保達雄氏には、格別のお世話をいただいた。これらのかたがたの献身的など協力を得たことを銘記して心から感謝の意を表したい。

なお、末筆ながら、後日遺物の調査にあつては、県文化財専門委員米山一政氏、骨の調査にあつては、信州大学医学部鈴木誠教授のご指導を賜つた。記してお礼を申しあげたい。

また本図の遺構実測図については、国学院大学生児玉卓文君、遺物については真田町教育委員会柳沢孝雄氏の実測によるものをトレースした。あわせてお礼を申しあげたい。(川上)

II 遺跡の概観

日向畑遺跡は、前述のとおり長野県小県郡真田町の角間集落の入口付近の山麓に所在している。ここは真田町の東北部にあたるところで、町の中心部を南西から東北に縦断し、鳥居峠を越えて北上州にぬける国道144号線沿いの横沢集落から東へ1km入った地点である。ここから南西方を望むと真田方面、あるいは遠く上田市方面を望むことができ、まことに眺望のよい場所でもある。

遺跡の南限下には、鳥帽子岳に源を発する角間川が東から西へ流れ、また西方には神川の清流が北東から南西に貫流し、遺跡の前方で角間川と合流している。いずれの川にもほぼ並行して道路が走っているが、神川は前述の国道144号線が上田から真田をとおり上州に通じているし、角間川沿いには横沢から分岐した小道が角間集落を通過しさらに角間峠を越えてやはり上州に通じている。したがって古来より交通上の重要な地点でもあり、鎌倉時代以降諸国の豪族の争いが盛となつてからは、とくに軍事上重要な場所となつた。

遺構の背後の山を松尾古城と呼んでいるが、土地の豪族真田氏の築いた要害堅固な山城で、その南下角間集落西側の一帯も真田氏の最初の居館跡として考証されているところである。すなわち真田氏は、遺跡周辺一帯を根拠地として、上信国境の要路をおさえていたことが伺える。

日向畑遺跡もその居館跡の西側にあたる場所で、かつて松尾山常福院と呼ばれる寺院があつたことが記録にみえる。この寺は真田氏の菩提所であつたが、後に同町の長谷寺へ移されたという伝承がある。明治初年ごろまでは堂宇が残つていたらしいが、^(註1)寺としての終末は安政・万延ごろであつたと言われている。現在はここに安智羅明神と、その前面に阿弥陀如来を祀る阿弥陀堂があり、(第1図)角間区と横沢区の保管となつて、崇敬の中心である。安智羅明神には、真田氏中興の祖といわれる真田一徳斎辛隆16才の姿と伝えられる木像を御神体として祀つており、それにまつわる伝説

も残っている。

いずれにしても、これらによつてわずかに昔の面影をとどめているが、発掘調査の行なわれた地点は、これら堂宇の西側約40mのところで、長い年月のうちに山ぎわの畑となつていたところである。

日向畑遺跡周辺の環境は以上のとおりであるが、目を真田町全域に向ければ、ここに発祥したといわれ、後に上田城を築城した真田氏に関係の深い寺院、遺跡および記録等多数残っている。

また、当地域には五輪塔・宝篋印塔等のいわゆる石造文化財も各地にみられる。

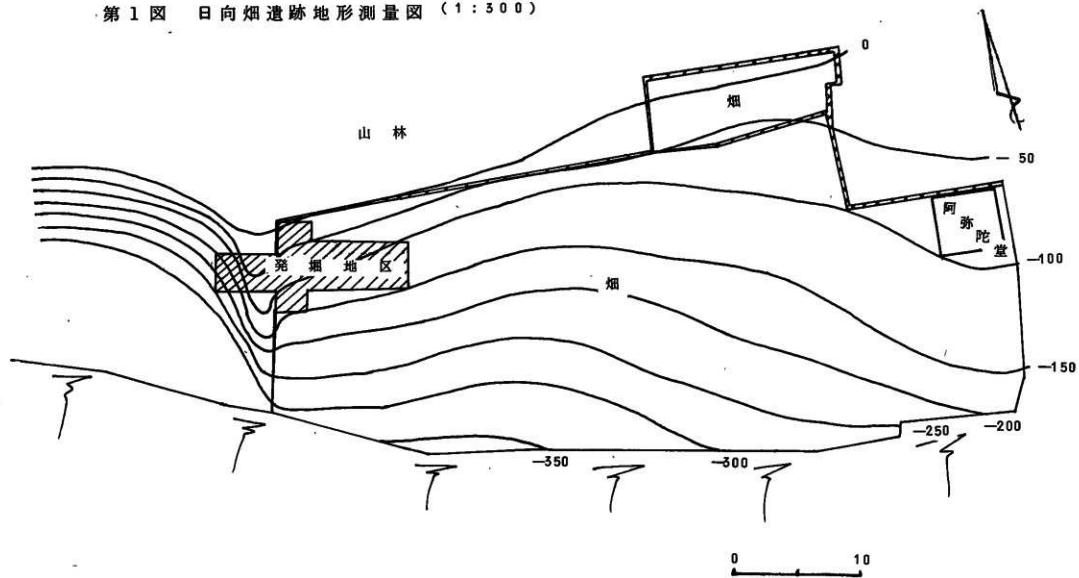
(川上)

註1 長財産区「長村誌」昭和42年

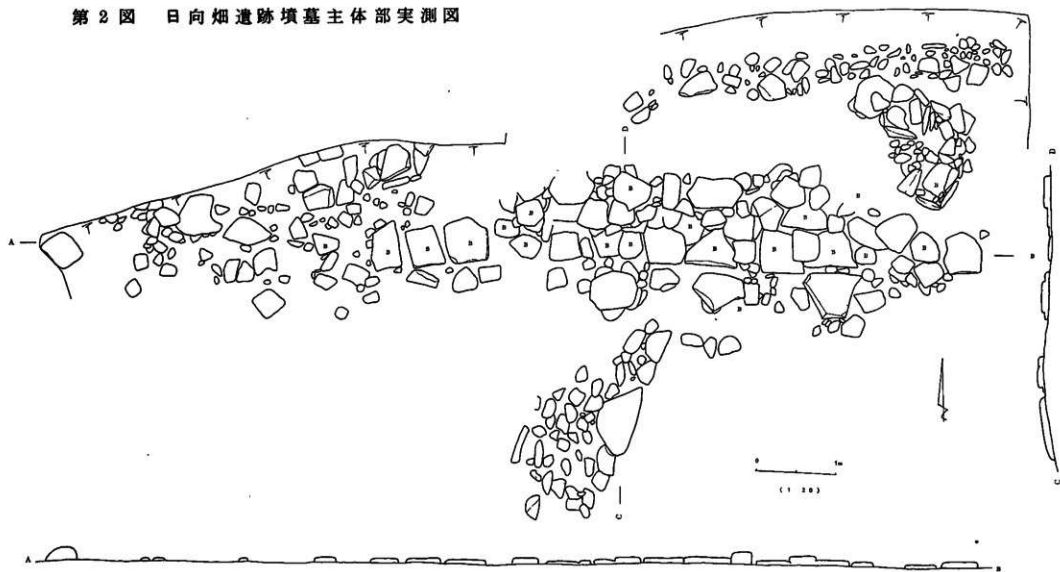


挿図一 骨埋葬遺構

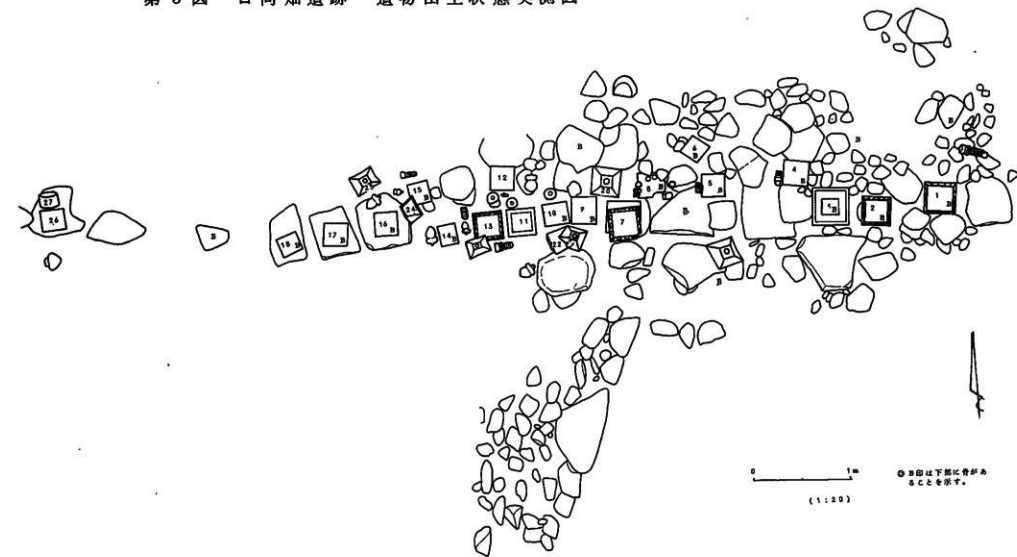
第1图 日向烟遗迹地形测量图 (1:300)



第2図 日向畑遺跡墳墓主体部実測図



第 8 図 日向畑遺跡 遺物出土状態実測図



III 検 出 遺 構

日向畑遺跡から検出された遺構は、五輪塔および宝篋印塔を墓塔とした墳墓跡で、埋葬された人骨は28箇所から発見され、すべて火葬骨であった。

発掘調査にあつては、耕作中にすでに発見されたという畑の北西隅に南北2×10mのAトレンチとそれに交差した東西3×10mのBトレンチを設定して行なつた。山ぎわのわずかに南に傾斜する畑の土壌は砂を多く含み比較的掘りやすく、しかもトレンチ設定が偶然にも遺構の真上であつたため、遺構の検出は容易であつた。

表土下わずか15cm位の部分から、すでに石塔の各部が検出されはじめた。さらに下部および広がりを追求した結果、石塔の並びが東西に規則正しく続いていることが確認できた。第一次調査時点では、遺構西側部分が畑外の山の斜面にまで延長していることがつかめたが日程の関係でその部分は次回にまわすことにした。第二次調査においては、この山の斜面を大きくはぎとり、西側の続きを調査し、遺構のほぼ全域を確認することができた。その結果、墳墓主体部の台石の配石規模は、東西10.5m南北巾2mであることがつかめた。さらに付属する遺構として、前面中央部に参道と推定される配石遺構と、墳墓背後に石垣遺構が確認された。以下、それについて若干記述したい。

1 墳墓の主体部

(第2図)

ここは、石塔を配置して、その下部に納骨をした墓域の中心部である。検出された石塔群の下部は、背後の山から産出される凝灰岩質の板状の台石を整然と敷きつめてさらにその下部に火葬骨を納骨した遺構であつた。

板状の台石の配石規模は、前述のとおり東西10.5m、南北巾約2mであるが、畑の下に検出された東側半分は整然としているのに対して、山の斜面下にあつた西側部分は、かなり攪乱されていた。このことは石塔の数および納骨の数においても同様

であつた。むしろプライマリーな層位を残していると思われた山の斜面下より、畑の部分の遺構の残存状態の方が良好であるというのは、いかなる意味をもっているのであろうか。

また、五輪塔、宝篋印塔の石塔群は完全に揃つたものは認められなかつたが、地輪の並びと納骨の状態から、東西三列の並びがあつたものと思われる。

2 火葬骨埋納部遺構

石塔群をのせた台石下部は、いわゆる火葬骨を納骨した部分である。台石下部すべてに埋葬した形跡は認められなかつたが、石塔をのせた台石下部に納骨されたものが多かつた。しかし、例外的には宝篋印塔の基礎の石材をくりぬき、その中に火葬骨を埋葬した例もみられた。また石塔下部に納骨を行なつていないもの、いわゆる供養塔としての性格をもつたものもあつた。

本遺構で一番多くみられた埋葬例は、台石下部に直径50cm、深さ30cm前後の簡単な石組みの小ピットを作り、その中に納骨し、台石と同様な石材の平らな蓋石をかぶせたものであつた。(挿図第2図)、また平石をたてて四方をかこみ、中に納骨しその上に蓋石をかぶせた例もみられた(挿図第8図)、これは上部の石塔の種類が不明であつた。

埋葬された骨はすべて火葬骨であることは前述したが、本遺構からは28箇所検出された(図版中のB印)、その内訳は以下のとおりである。

五輪塔下部のもの	11
宝篋印塔下部のもの	4 (うち2は基礎の石の中)
その他上部不明のもの	8

埋葬された火葬骨は、比較的残存状態がよく、その量は成人骨一人分は充分あるうかと思われた。後日この骨の一部を信州大学医学部鈴木誠教授の研究室に送り調査していただいたが、時代的な判定等については不明とのことであつた。

8 参道状配石遺構

墳墓主体部の付属物として、前面中央部にほぼ南北に延びた参道と思われる配石遺構が確認された。その規模は南北8 m、東西の巾約1.8 mであつた。この石材に用いたものはやはり凝灰岩質の山石であつたが、中に川原石も若干みられた。この遺構は多分下の道路から、この墓地に登るための参道の配石遺構と推定したが、南方部の続きはすでに破壊されており不明であつた。

4. 石垣遺構

本遺構の背後、すなわち山側の面に石垣を構築した形跡がつかめた。第二次調査で山の斜面をはぐ作業の際に確認されたものである。

石材は台石と同様に付近の山から産出される凝灰岩である。また石垣の積み方は、板状のものを横積みとしたもので、高さ約1 mほどであつたと思われる。

これは山の斜面を削つて本墳墓を作つたため、山の押し出しを防ぐためのものであつたろうか。第一次調査においては畑の部分からは確認されなかつたが、墓地の最初の構築にあつては背後にすべて石垣を構築したものと思われる。(川上)

IV 出土遺物

この墳墓址から検出された遺物は、宝篋印塔・五輪塔・鉄鎌・刀子・古銭・土器・石器および火葬骨などである。火葬された人骨は、参道と推定される配石遺構の正面に2箇所、その背後（北側）に1箇所検出され、これを中心にして、南方位で、西側では二列東側では三列に、それぞれ東西横列に配列された状態で検出された。しかし、西側の部分は、まず参道状遺構の墳墓寄り西側の配石が、かなり広範にわたって失われていた。そして、蓋石あるいは台石として配された板石が東側部分に対して著しく少なく、または左右の均衡を欠いている。これらの事情を推考すれば、西側の墳墓列の南端一列が、なんらかの理由によつて破壊・滅失していることも考えられる。因に、この墳墓址から検出された人骨は28箇所であるが、これに対して宝篋印塔6基、五輪塔11基分が検出され、うち2基の宝篋印塔は供養塔としての性格が与えられていたらしく、埋葬骨を伴っていない。さらに検出された宝篋印塔は、いずれも塔身と笠を欠き、相輪も破損している。この状況は、五輪塔においても同様である。すなわち、検出された五輪塔11基分は風空輪9個体、火輪7個体、水輪8個体などで11基の数は、地輪の数から推定したものである。このように宝篋印塔では、その石造塔婆としての中心である塔身を欠き、火葬骨が埋葬された墳墓址28箇所に対してこれに対応する宝篋印塔、および五輪塔は、不完全なものが16基存在するのみである。明らかに破壊、隠蔽の痕跡が伺われる。この点については、埋葬者に対する推考と併せて後述したい。なお出土遺物の概要については、火葬骨の埋葬状態、遺物の出土状態、出土遺物（宝篋印塔・五輪塔・鉄器・古銭・土器・石器）の順序で詳説する。

1 火葬骨の埋葬状態

わが国における火葬は、文武天皇4年(700年)に、元興寺の遺唐学僧道昭が泊瀬山に火葬された折に、柿本人麿呂が詠んだという「(註1) 栗原に火葬す」とある『続日本紀』の記録を初現として『万葉集』にも、土形娘子が泊瀬山に火葬された折に、柿本人麿呂が詠んだという「(註2) 隠口の泊瀬の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」の歌が所載されている。そして、この火葬は、大阪府堺市(註3) 陶器千塚内のカマド塚の調査によつて、更に7世紀初頭ごろまでさかのぼることが明らかにされた。この仏教思想が招来した火葬の出現は、古墳に象徴される古代墓制に一大転換期をもたらし、7世紀は火葬墳墓の導入期、これに続く8世紀は火葬墳墓の形成・展開期と区分されている。そして、9～11世紀にかけては、寺院墓の形成が進められ、更に鎌倉時代からは、寺院墓の展開期へ向うのである。

今回調査された日向畑の墳墓址は、ここに常福院という寺があり、明治初年ごろまでは、堂宇があつたといわれるから、この寺院に関連する墳墓と考えることができる。この寺は松尾山常福院と称し、創建の時期は明らかでないが、およそ万延か安政ごろに終末し、古くは真田氏の菩提所で、後に長谷寺へ移されたとの伝承がある。また真田氏为上田に移り、ここに設けた菩提寺を常福寺と称したが、この常福院に由来するとも考えられている。(註4)

この地方における葬制は、最近まで広く土葬が行なわれていた。中世の葬制は土葬と火葬の二形式が行なわれ、後者は、武士あるいは寺院関係のものなど、特定の身分の者のみ行なわれていたことが推考される。

日向畑の墳墓址では、納骨のための石組があり、その中に火葬骨を納めて蓋石をし更に板状の台石を乗せて五輪塔などの仏塔を置くものと土中には埋骨の設備をつくらなくて、板状の台石の上に置かれた宝篋印塔の基礎の中が中空となつて、そこに納骨したものの二形式が認められた。また、納骨のための石組には、平石を立てて方形に囲い、底石を置いて中に納骨するものと、径5～6cmぐらいのやや長目の円礫を逆

円錐形に積みあげて石組をつくり、中に納骨して蓋石をのせるものがある。深さはいずれも25cm前後であるが、前者はやや小型で、一辺が約15cmほどの方形につくられ、構造はかなり手を加えた丁寧な作りである。後者は蓋石部の径が約42cmで、逆円錐形のやや雑な構造である。いずれも納骨には、頭蓋骨を上になめらる等の一定の秩序がなく、雑然と拾つて埋納した形跡があり、中に木炭などもかなり混在していた。そして、この火葬骨中には、六道銭として納められた古銭を含むものがあつた。なお火葬はどこのもので行なわれたのか明らかでないが、参道正面の墳墓列の背後に、厚い木炭の層を検出した。

火葬には、日向畑の墳墓址のように石組内に納骨する例は稀で、火葬骨を直接土中に納骨するか、容器に入れて埋納する場合が多く、鎌倉地方のように山腹にうがたれた岩穴(方言やぐら)内に埋納されたものもある。^(註7)

2 遺物の出土状態 (第3図)

参道状配石遺構より西側は、背後の斜面が地すべりした崩土で厚く覆われていた。しかしその地点より東側は、畑地として利用され、耕耘機の爪が遺物にふれる程浅い表土層下で検出された。

まず宝篋印塔は、参道状配石遺構正面の埋骨を伴う2基の五輪塔の東西に、東側に1基、西側に2基と、およそ並列に配されていた。このうち、西側の2基は、埋骨を伴わない供養塔であり、東側の1基は基礎内に火葬骨を埋納する墓塔であつた。そしてこの基礎に伴う相輪が、背後、あるいは前面などにころがり、馬耳形突起の隅飾りも、ほぼ同地点から破片の状態を検出された。また3基の宝篋印塔は、墓域東端の前列に並列され、東側の2基は台石の下に西側の1基は基礎の内部に、いずれも火葬骨を埋納する墓塔であり、背後から相輪2個分が検出された。しかし笠部は僅かに馬耳形の隅飾りが破片として検出され、塔身は1個体も検出されていないのは、いかなる理由によるものであろうか。

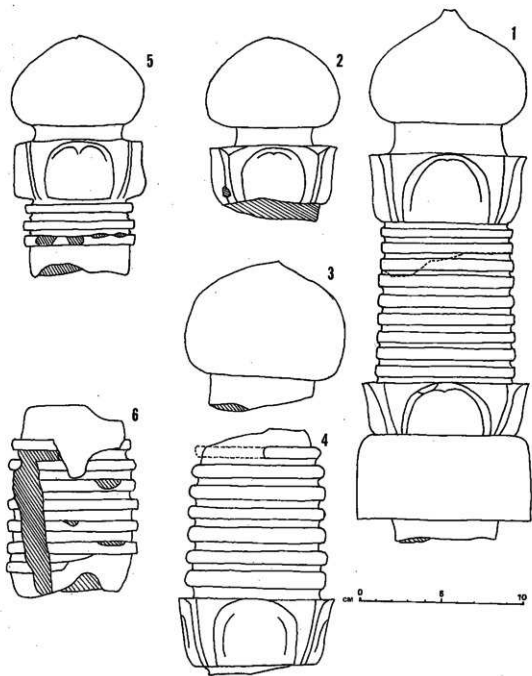
五輪塔の残存状態は、西側寄りが比較的良好であり、参道状配石遺構の正面に2基が並び、2基の宝篋印塔を間にして、更に西側前列に4基、その背後に並列して2基が検出された。しかしこの部分には、上部の墓塔を失って、火葬骨を埋納する石組、あるいはその上に台石を残すものなど、更に3基が認められた。東側の墓塔群は、南前列に宝篋印塔が並び、中および後列に五輪塔が配列されていた。中の五輪塔は、中央寄りに3基が並び、後列には1基の五輪塔が検出された。そしてその両端には、火葬骨を埋納した石組があり、墓塔は失われていた。風空輪および火輪は、およその周辺に散在し、完存するものは見当らなかつた。土器片は、墓塔の周辺と墓塔群の前面から多く検出された。これらは、前記常福院に関連するものと、墓前祭等に使用されたものが含まれているものと考えられる。鉄鎌、および古銭は、墓域の整備中に墓塔群の背後から検出されたもの、および六道銭として火葬骨中に含まれていたものなどである。

8 宝 篋 印 塔

宝篋印塔と称する石塔婆は、五輪塔のライバルであり、中国五代の呉越王銭弘俶が造立して頒布した八万四千金塗塔に起源するといわれている。そしてその宗旨は、釈(註8)道喜の「宝篋印塔記」に基づくことされ、中に宝篋印陀羅尼を納めたので、この名が用いられている。そして下から方形の基礎、塔身、笠(屋蓋)、そしてその上に相輪が(註10)たてられている。この塔の特色は、基礎の上端と笠の上下のつくり、笠の四隅の突起にある。

検出された宝篋印塔は、相輪部分が宝珠4個、うち1個は九輪の一部を(第4図5)他の1個はほぼ完形に近く復元された。(第4図1)。九輪部分は、他に2個体を検出し(第4図4・6)、請花、伏鉢部分は3個体であつた(第5図15~17)。従つて相輪部分は計4個体が検出されたことになる。屋蓋部の笠は、馬耳形突起の隅飾りが6個体と(第5図5~10)、同破片4個が検出されたのみで、本体の大部分は

第4図 出土遺物 宝篋印塔相輪



失なわれていた。また塔身が1体も検出されていないのはなぜであろうか。基礎は6基がほぼ完全な形で検出され、その中に納骨部をもち、火葬骨を埋納するものが確認されるなど、この仏塔のもつ性格に、大きな資料を提供したものと見える。

(1) 相輪(第4図1~6、第5図15~17)4個の相輪は、いずれも九輪の影りが深く、宝珠の背丈もあり、やゝ古様を残している。宝珠は尖頭の強いもの(1)とやゝ弱いもの(2~8)の2形式があり、前者は頸部が長く、請花が複弁であり、後者は頸部が短かく、請花は単弁である。伏鉢は幅が狭く背の高いものと(15、17)幅があり背の低いもの(1、16)の二形式があり、上端の両肩が、1→17→15→16としだいに落ちて、鏡餅状を呈してくる。しかし全体としては、北佐久郡望月町城光院の永正18年塔のような鈍重さはなく、中期に近いスマートさを残し、反面宝珠がつぶれはじめ、尖頭になる新しい様式も示唆している。すなわち、相輪の頭頂より伏鉢下端までの高さ、九輪部最大幅の比を示せば、下表のとおりである。

	相輪の高さ(A)	九輪最大幅(B)	$\frac{A}{B}$
鎌倉浄妙寺明徳8年塔	58.5 cm	12.0 cm	4.87
日向畑墳墓址出土	31.0	8.2	3.78
望月城光院永正11年塔	38.0	11.0	3.45
〃 18年塔	36.0	11.5	3.13
川西東昌寺永禄12年塔	24.2	9.3	2.6

この数値は、日向畑墳墓址出土の相輪が、およそ15世紀中ごろのものであることを示している。

(2) 馬耳形突起の隅飾り (第5図5~14)

検出された馬耳形隅飾りのうち、ほぼ器形がうかがえるのは、第2図6のみである。6は周囲すべてに輪郭を彫り出し、かど張つた2弧をつくり、全体がわずかに外反りしている。笠の軒口は、幅約2.1cmとやや薄目になり、切り口も内斜め切りになっている。これらの形式は、およそ室町時代中期以後の手法を示すものと考えてよからう。

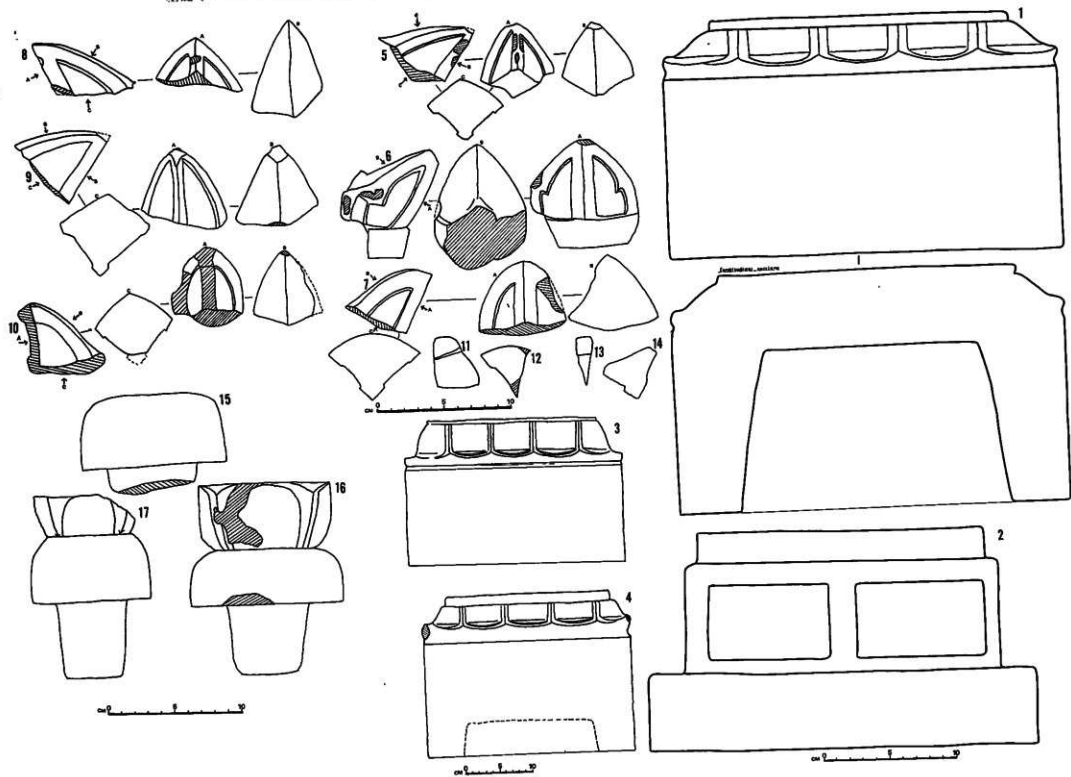
(3) 基礎 (第5図1~4、第6図1、2)

今回の調査で、基礎は6基を検出したが、その形式は一律でない。すなわち、これらを典型的に示せば、基礎の上端に単弁の反花をあらわし(第5図1・8・4、第6図1・2以下これをA類とする。)、側面が無地につくられているもの(第5図1・3・4第6図2以下これをa類とする。)と、格狭間につくられているもの(第6図1以下これをb類とする。)がある。この形式の基礎には、上端の反花部分に蓋になり、内部が中空になつて納骨部をつくるもの(第6図1・2以下これをI類とする。)と、無地の台座の内部から底部にわたる大部分が中空のもの(第5図1以下これをII類とする。)、あるいは底部に近い一部分のみが中空のもの(第5図4以下これをIII類とする。)およびこのような加工を施していないもの(第5図8

以下これをIV類とする。)の4形式がある。この外、今回検出された基礎には、上端に反花をあらわさないで、側面に格狭間をつくるものがある(第5図2以下これをB類とし、上記の分類に従つてb-IV類とする。))。

項目	整理番号	類型	基礎幅(A)	基礎高さ(B)	$\frac{A}{B}$
第5図 1	13	A-a-II	29.6 cm	18.0 cm	1.64
" 2	11	B-b-IV	28.9	16.0	1.80
" 8	1	A-a-IV	32.5	21.4	1.51
" 4	2	A-a-III	31.0	23.3	1.33

第5圖 出土遺物 宝篋印塔
 基礎 (1~4) · 馬耳形網飾 (5~14) · 相輪 (15~17)



第 6 図	1	3	A-b-1	39.8	26.8	1.51
"	2	7	A-a-1	34.6	19.7	1.75
真田耕雲寺塔		—	A-a-IV	34.3	18.0	1.90
川西東昌寺永禄5年塔		—	A-a-IV	26.5	19.5	1.85

宝篋印塔の基礎は、年代がさがるに従つて、幅に対する高さの割合、すなわち背の(註12)高くなる傾向にある。詳細な資料は、後述の考察で示すことにしたいが、川西村東昌寺の永禄5年とはほぼ同時期と思われるものが1基あるほかは(第5図4)、全体的にやや古い時期に属するものが多く、真田町耕雲寺の塔群に類似するものが多い。この数値は、先に示した相輪の時期的特色とも一致している。

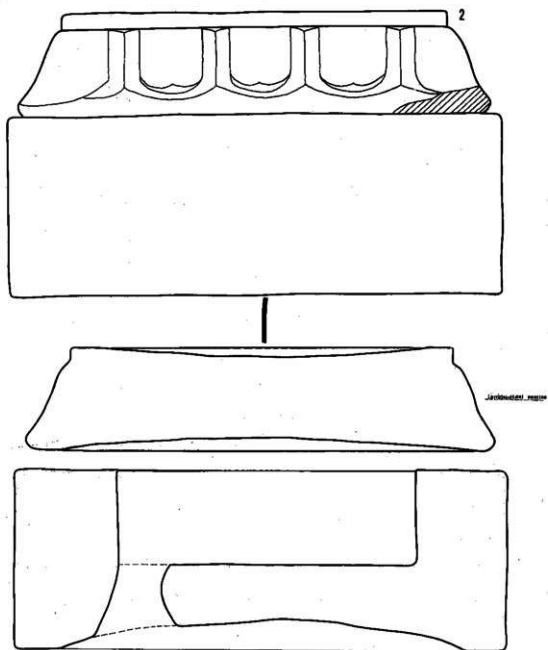
(a) 基礎A-a-I類

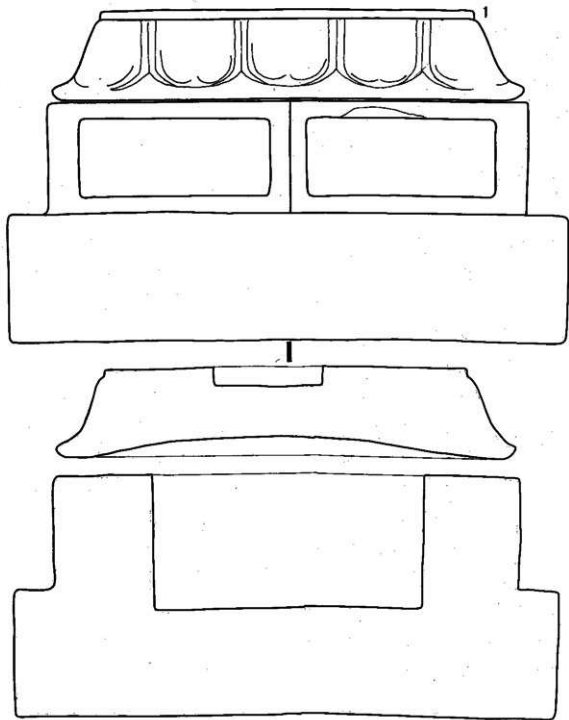
蓮弁を描いた反花座は、正面に8枚を並べ、両端に半弁をあらわし、単弁で彫りが深く、垂れて末端が強く反つている。この様式に類似する基礎は、笠、相輪の一部(註13)と共に残っている埴科郡戸倉町、大正橋際の佐良志奈神社の永和2年塔の基礎である。日向畑土の基礎は、反花座が蓋となり、中央部が内弯し、台座の内部には深さ9.6cm 横幅20cmの納骨部分がつくられ、底の一部が欠損している。各部の計測値は、上端縁の横幅が26.9cm、厚さが0.9cm、蓮弁の長さが4.5cm、横幅が4.4cm、下端の反り部分の厚さが2.1cm、台座の高さが12.2cmで、横幅が34.6cmである。

(b) 基礎A-a-II類

蓮弁の並びは、A-a-I類の第6図2と同様であるが、反花の彫りがやや浅く垂れた花卉の先端部分で、弱い屈折をして反りをつくつている。反花座と台座の境はやや幅広いU字形にえぐり、この手法が、第5図3・4にも用いられている。真田町耕雲寺の宝篋印塔には、手法と酷似するものが多く、同じ石工の手になるものと考えられる程である。また同町横尾の梅ノ木にある1基も手法的に酷似するものがある。第5図1の計測値は、上端の縁が横幅22.2cm、厚さ0.7cm、蓮弁の長さが3

第 6 図 出土遺物 宝篋印塔基礎





cm、横幅が4.5cm、間に幅1.1cmのu字形溝をつくり無地の台座に続いている。
台座は横幅が29.6cm、高さ12.3cmである。

(c) 基礎A-a-III類

反花座上端の縁は、横幅が24.5cm、厚さが1.2cm、蓮弁の長さが5.4cmで
横幅が5.1cm、単弁先端部分の屈折は第5図1より弱い。台座は横幅が81cmで、
高さが16.6cmを計測し、u字形の溝幅は1.5cmを計測した。手法および形態は
第5図1に類似する。

(d) 基礎A-a-IV型

この形式には、第5図3があり、形態は第5図1・4に類似し、台座上端のu字形
の溝幅が僅かに狭い。反花座上端の縁は、横幅が25.5cm、厚さが1cm、蓮弁の長
さが4.5cm、横幅が5.5cmである。u字形の溝幅は0.8cmと狭く浅い。台座は
横幅が82.5cmで高さが14.8cmである。

(e) 基礎A-b-I類

この類型の基礎は、反花座上縁の上面中央に、一辺8cmの方形のくぼみをつくり、
台座の側面に格狭間をつけているほかは、第6図2の形態に類似する。しかし台座の
下に基壇をつけ、納骨部は9.5cmとかなり深く彫り下げられている。

反花座上縁の縁は、横幅が26cmで厚さが0.8cm、蓮弁の長さは5.8cmで横幅
が4.5cm、単弁の下端が強く反つている。蓮弁の反つた部分の先端から台座の上端
までが2.2cmで、台座の横幅が84.1cm、高さが7.2cmである。基壇は横幅が
39.8cm、高さが9.3cmを計測した。

(f) 基礎B-b-IV

台座上端の縁幅が、およそ2.8cmと厚いが他の形態は、反花座の部分を除いた第
6図1の台座に類似し、基壇に付属している。

4 五輪塔

五輪塔の起源については、諸説があり、佐々木利三氏は、「空海以後の或時期に我國に於て、五輪塔形が成立したものと考えるのが妥当なのではあるまいか」と述べている。しかし五輪図形は平安時代初期ごろに数種が伝来し、密教の入りによつて創始されたものである。

日向畑墳墓址から検出された五輪塔は、風空輪が9個、火輪が7個、水輪が8個、地輪が11基などで、完存のものはない。

(1) 風空輪 (第7図1~9)

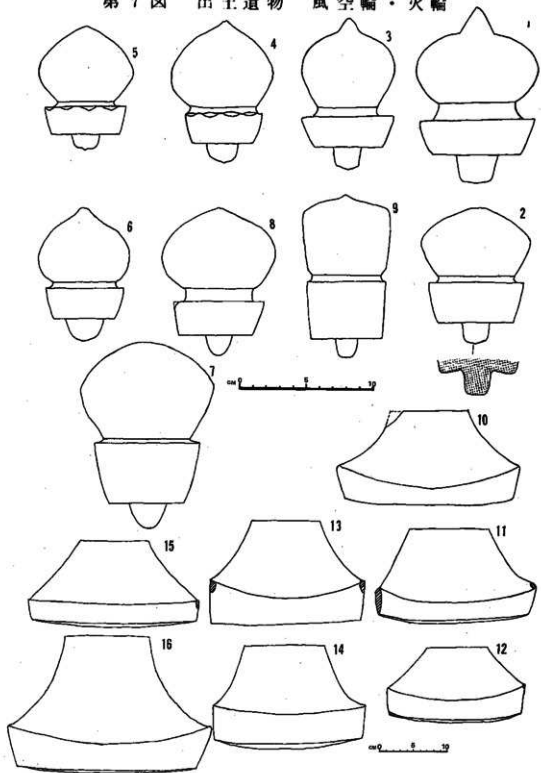
空輪は、宝珠形が多く、ややつぶれて尖頭するもの(1)、宝珠の原形を失い、頭頂に円味がなく、側面が直線的なもの(9)も含まれている。特に古様を示すものはなく、空輪の直径が風輪の径を上まわり、外にはみ出しているものが多い。

(2) 火輪 (第7図10~16)

軒口は内斜めに切り、下部の反りはゆるやかであるが、上部の反りが両端で強くなり、隅の厚さを著しく増すものがある(10、16)、また軒口の下端が直線的になり、上部の線が両端で反るやや新しい形式も含まれている。概して室町時代後半から末期におよぶものが多い。降り棟は反り気味で、棟と軒口横幅の計測値は下表のとおりである。

No.	整理番号	棟 幅	軒口上横幅	軒口下横幅	中央部高さ	備 考
10	21	1 1.8 cm	2 7.2 cm	2 5.4 cm	1.4 cm	棟端欠損
11	22	1 2.0	2 4.2	2 2.5	1 4.2	軒端欠損
12	28	9.2	2 0.7	1 9.8	1 1.2	"
13	24	1 0.4	2 8.2	2 2.5	1 5.5	"

第7図 出土遺物 風空輪・火輪



1 4	2 5	1 2.1	2 2.8	2 2.2	1 5.4	
1 5	2 6	1 0.3	2 5.5	2 4.5	1 2.8	軒端欠損
1 6	2 7	1 2.5	3 5.0	2 6.8	2 0.4	

(3) 水輪 (第8図1~3)

検出された水輪は、そろばん玉形のような末期の形式はないが、高さに対して胴部径が大きくなり、概して新しい形式が多く、比較的古様を残すのは8のみである。

底	整理番号	高さ (A)	上面径	下面径	胴部径
1	S 1	21.2cm	17.3cm	17.8cm	34.5cm
2	S 2	18.0	28.0	28.0	32.7
8	S 8	19.1	19.0	19.8	27.8
鎌倉極楽寺忍性塔	(註15)	78.0	58.0	53.0	96.0
上田市金王五輪塔	(註16)	79.0	49.0	49.0	57.5

(4) 地輪 (第8図5~14)

日向畑墳墓址から検出された11基の地輪は、第5図の7を除けばほぼ完存で、この墳墓址の時期を知る上に重要である。すなわち上小地方における地輪の時期的変化は、横幅に対する高さの比が大きくなる程時代が下がる。次に地輪の各部の計測値を示すことにする。

底	整理番号	横 幅	奥 行 き	高 さ	備 考
4	4	27.8cm	27.9cm	20.0cm	完 存
5	5	28.7	28.6	16.5	上部一部欠損
6	6	24.8	24.0	18.6	完存、底面中央が上げ底

7	8	22.0	21.0	13.5	隅欠損
8	9	28.0	28.0	22.0	完 存
9	15	22.8	23.0	17.0	完 存
10	16	26.6	26.2	15.5	完 存
11	17	24.0	24.0	17.0	完 存
12	10	24.0	23.0	18.0	完 存
13	12	24.5	24.5	19.5	上両端欠損
14	14	20.5	22.0	15.0	完 存

(5) 鉄鎌 (第9図20)

刃渡りおよそ15cm、刃部中央の巾が8.8cm、横厚が0.2cmの鉄鎌である。この鎌は、柄部に対する刃部の角度が浅く、柄部末端は鉤状につくられている。

(6) 古銭 (第9図21~23)

検出された古銭は、開元通宝1枚と、腐食の激しい銅銭2枚である。他に火葬骨中から地元の人が古銭を発見したといわれている。しかしその所在は明らかでない。開元通宝は比較的良好に遺存し、輪が潤縁で孔は小さ目である。銭文は容易に判読ができる。しかし他の2枚は腐食して肌に穴があき、破損している。この開元通宝は、元豊、皇栄、熙寧に続いて多く流入しているが、墓地、寺院などから出土するのは多く(註17)北宋銭で、開元通宝を出土する事例は少ない。

(7) 土器

検出された土器は、いずれも内耳土器の焼質のもので、坏、鉢形、おろし皿などで完形できるものは2・8点である。

(a) 坏 (第9図1・2・9・10)

口縁は内弯し、胴部の張りが弱く、底部はヘラ切りで、稜角が目立つ。9は糸切底で内面に斜十字につけられた沈線が刻まれ、用途はおろし皿のようなものであろうか。

(b) 鉢形土器 (第9図3~5)

器面は、淡い茶褐色を呈し、5にはロクロ状の擦痕が目立つ。3・4には、同様な擦痕が内面に認められ、口縁は弱い外反りである。胴部以下はいずれも欠損し、復元できるものがない。

(c) 甕形土器 (第9図6~8、11~14)

口縁は角形で、弱く内湾している。12・13・14は、頸部で弱い屈折をして胸部に続いている。

(d) 底部 (第9図15~19)

下胴から底部にわたる側縁が、やや内湾気味のもの(16~18)と、直線的のもの(15・19)がある。いずれも底部は平底で、底部縁辺の稜角がはつている。

(4) 石皿 (第9図24・25)

器台付と平底の2形式があり、いずれも破片で復元できるものはない。材質は輝石安山岩であり、肉厚は25が薄く約8mm、24は厚手で約2cmを計測した。(小林)

註1 黒坂勝美他「続日本紀」(新訂増補国史大系2)昭和41年吉川弘文館

註2 高木市之助「万葉集-428」(日本古典文学大系)昭和32年岩波書店

註3 森 浩一「大阪府泉北部陶器千塚」(日本考古学年報9)昭和36年誠文堂

新光社

註4 檜崎彰一「墳墓」(日本の考古学歴史時代下)昭和42年 河出書房

註5 上野尚志「小泉郡年表」 明治17年

註6 玉井憲定「仏閣」(長村誌) 昭和42年真田町長財産区

註7 赤星直忠「石造墳墓と矢倉」(日本の考古学 註4に同じ)

註8 藪田嘉一郎「宝篋印塔の起源」(宝篋印塔の起源、続五輪塔の起源)

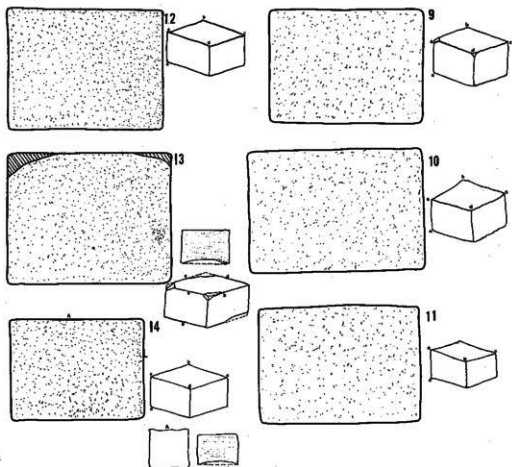
昭和41年 総芸舎

註9 千々和実「宝篋印塔」(大塚史学会編、新版郷土史辞典)

註10 日野一郎「宝篋印塔」(新版考古学講座7有史文化下)昭和45年 雄山閣

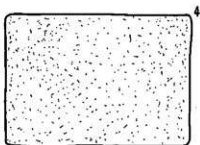
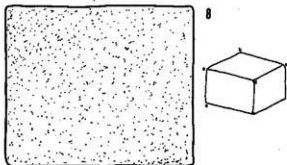
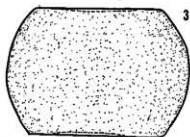
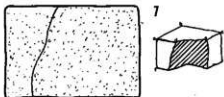
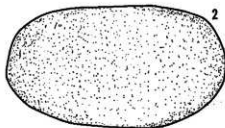
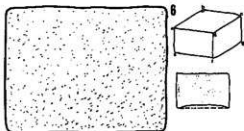
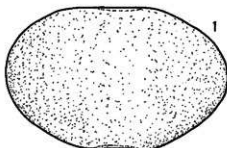
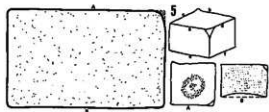
●宝篋印塔各部の名称は、地方史研究協議会「地方史研究必携」岩波書店による。

第 8 図 出土遺物 水輪・地輪

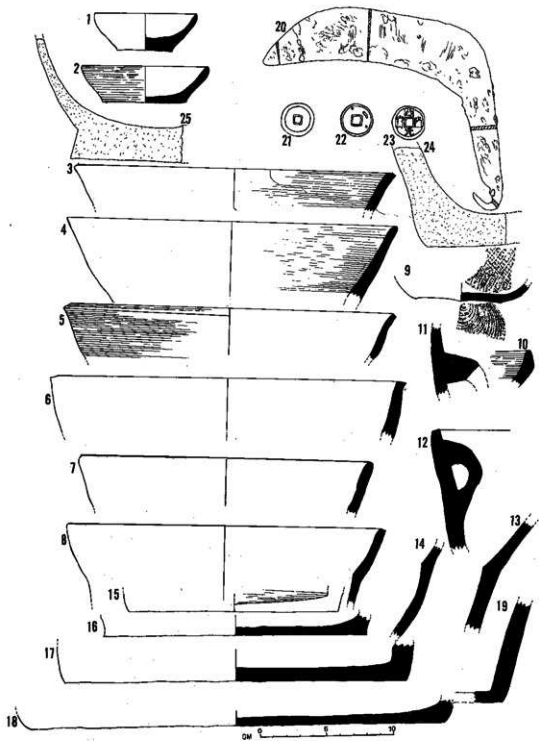


UNIVERSITY OF TOKYO

0 5 10
cm



第 9 図 出土遺物
土器・鉄器・古銭・石器



- 註11 宮下真澄「東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について」
(信濃17-10) 昭和40年 信濃史学会
- 註12 宮下真澄 前掲著
- 註13 日野一郎「北信濃および天竜流域における宝篋印塔形式」
(日本歴史考古学論 頁2) 昭和43年 雄山閣
- 註14 佐々木利三「五輪塔の成立」(五輪塔の起源) 昭和45年 総芸社
- 註15 赤星直忠「鎌倉の石造建造物」(鎌倉市史・考古篇) 昭和34年
吉川弘文館
- 註16 上田市文化財調査委員会「金王の石造五輪塔」
(上田市指定文化財調査報告書6) 昭和45年 上田市教育委員会
- 註17 矢島恭介「貨幣」(日本考古学講座7 歴史時代) 昭和31年 河出書房

◇ 宝篋印塔と五輪塔の実測図は、真田町教育委員会の柳沢孝雄氏が作成し、その原図をもとに小林が調整した。

V 考 察

1 墓制に関する考察

日向畑墳墓址の墓制は、真田氏初期の居城と伝承される松尾古城の麓で、真田氏居館跡と伝えられる地域の一部に位置することを注目しなければならない。しかし真田居館跡が所在したという地域は、角間に面した狭隘なテラス状の台地で、地方武士の根古屋的居館が存在したとしても、やゝ狭小にすぎはしないだろうか。この点の解明については今後の学術的な検討を待たなければならないが、いわゆる真田氏居館跡と伝えられる地域の東方、すなわち角間の集落に接する地域に比較的広大な場所がありまた松尾古城の水の手を背にし、古城への容易な登り口にも当たる地点に掘り割とも目すべき微地形がある。この地点を真田氏居館跡と推考すれば、日向畑の地籍は、古来真田氏の菩提所と伝えられる松尾山常福院廃寺址にあたる。そして日向畑の墳墓址はこの常福院の寺院墓と考えるのが妥当であろう。

さて、この地方で室町時代の初期から戦国時代ごろにかけての宝篋印塔や五輪塔を伴う葬制は、いかなる階層の墳墓であろうか。宝篋印塔や五輪塔などの仏塔については、^(註1) ^(註2) 小山真夫氏や宮下真澄氏らの先学によつて研究が進められ、また最近では上市市内各校の教職員によつて、鋭意研究が行なわれている。しかし日向畑遺跡のような群集墓については、墳墓という性格も伴つてか、葬制の研究が遅れている。こうした中で^(註3) 宮下真澄氏が昭和41年4月に行なつた佐久市岩村田の北西久保遺跡の調査報告は、中世の葬制を解明する上に正に貴重な一篇といえる。この墳墓址は、「平家物語」や「源平盛衰記」にみえる根々井氏のものとする説、鎌倉初期以来佐久郡に所領をもつ大井氏のものとする説に分れているが、いずれもこの地方の武士階層のものとする点では一致している。そして元文年間に著わされた「四隣譚載」に「西久保、一本柳くねさき、右之地各廃跡あり。詳かならず。」と記されているところから、寺院墓で

あつたことも推考される。

この外この地方で宝篋印塔や五輪塔が群集し、墳墓址と判断できるものは、真田町傍陽の大庭地籍にある耕雲禅寺内の仏塔群である。この墳墓址は、耕雲禅寺の裏山の斜地につくられ、日向畑遺跡や北西久保遺跡と同様に、火葬骨を土中に埋納して、宝篋印塔や五輪塔を上^(註4)に置いたものである。そしてこの墳墓址の位置は、「大塔物語」の中に、「大手の一の攻口は、禰津越後守遠光これを固む、その一党に茨路守貞幸、右京亮宗直、同上総守貞信、三村孫三郎種貞、板井、別府、小田中、奥田、横尾、曲尾の人々」とある曲尾氏の山城、根古屋城と居館址に近く、この一族に関連するものであることはほぼ間違いない。この墳墓址は裏山の地すべりによつて埋没し、通日土留めの工事の際に発見され、現位置はその際に移動したもので、発見時の調査が行われていないのは、まことに残念である。この墳墓址は、現存する仏塔の形式、あるいは手法等から、およそ日向畑遺跡と同時期のもので、特に反花座の逆蓮弁や相輪の手法が、同じ石工の手になるものと推考される程酷似している。しかし仏塔の数が示す規模は、遙かに日向畑遺跡のそれを凌駕している。この外には横尾氏の山城、尾引城の麓にも、かなりの仏塔を散見するが、群集墓といえるものは、未だ確認されていない。また真田の観音堂、いわゆる岩井堂観音堂付近にも相当数の仏塔があり、観音堂は真田氏の守仏となり、尊崇されていたといわれ、ここに弘長三年の寺碑がある。そして角間川が神川に合流する川沿いにも、五輪塔の群集する地籍があり、ここを五輪場と称し、付近に善慶寺、法性寺などの小字が残り、寺院のあつたことが伝えられている。これがいかなる性格のものであるか明らかでないが、山城や館の周辺で合戦が行なわれた場合に、そこに死者を葬り、五輪塔などを建立する事例が多い。

なお日向畑遺跡のように、館跡内あるいはその付近に墳墓群を発見した事例は、湯河原の土肥氏の館跡と推定される地籍から発見された墳墓群、埼玉の畠山氏の館跡近^(註5)くから発見された五輪塔群など、かなり多くの報告があり、いずれも地方的武士階級

の墳墓址と考えられている。

(註6)

火葬骨を石塔の内部に埋納する例は、鎌倉の調査で多く報告され、五輪塔の地輪上面や水輪上面、宝篋印塔の塔身などをほりくぼめて分骨を埋納している。しかし日向畑遺跡出土の宝篋印塔の2基のように(第6図)、反花座部を台座と切りはなし蓋とし、台座の上面中央を方形にほりくぼめて、そこに火葬骨を埋納する例は少ない。この葬制例については、今後の各地の調査報告を待つて推考したい。また台座の下半をくりぬくのは、内部の埋納を簡便にしたか、材質の輝石安山岩がこの地方のものではないことから、石材運搬の便を考えてのことか明らかでない。

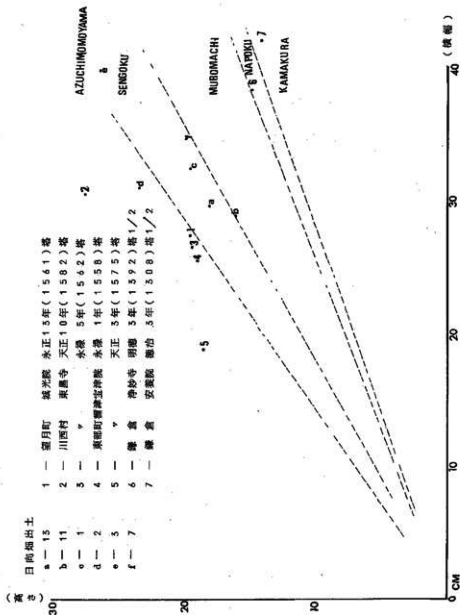
前述の北西久保遺跡では、墳墓を工字形に配し、火葬骨にした骨片を玉石、または砂利石の中に直接埋納し、日向畑遺跡と同様に骨壺を用いていない。しかし日向畑遺跡の場合は、板状の台石の下に方形、あるいは逆円錐形の石椀状石組をつくり、その中に火葬骨を埋納し、六道銭を副葬している。そして墳墓群の前面から出土した坏の一点は明らかに燈明皿として用いられたもので、内部が油煙で黒く変色している(第9図1)。

2 石塔の形態からみた年代の推定

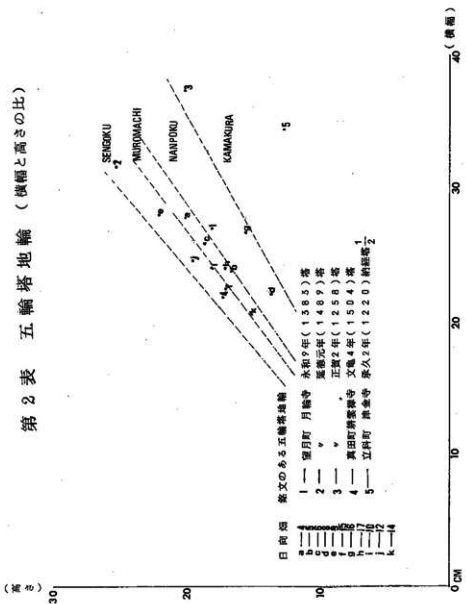
(1) 宝篋印塔

相輪においては若干の考察を前に述べたが、北佐久郡望月町の永正13年塔に比して、全長に対する九輪部の最大径が小さく、中期のスマートさを残しているが、宝珠はだんご形からつぶれて尖頭になる新しい形式を示している。また基礎は、年代が下るに従つて、横幅に対する高さの比が大きくなる傾向にあり、銘文も多くはここに刻まれている。この特色に着目して作成したのが第1表である。これによると、最も古い形式は、整理番号11のb塔である。その時期はおよそ戦国時代に入る寸前の15世紀中ごろの數値を示し、他の多くは戦国時代の初期からdのように、16世紀の中ごろに至る數値を示している。この所見は、相輪の推定年代とも一致し、わずかに残

第 1 表 宝篋印塔基礎（横幅と高さの比）



第2表 五輪塔地輪 (横幅と高さの比)



る馬耳形突起の隅飾の形式からみた推定年代とも矛盾しない。

(2) 五輪塔

風空輪はやや古い形式もあるが、だんご形から宝珠形に変化し、風輪に対して空輪の径が大きくなるものが多い。火輪、および水輪にも、風空輪と同様に、室町時代の前期ごろから戦国時代にわたるかなり広範のものが含まれている。この所見を宝篋印塔の基礎と同様に、多く銘文の刻まれている地輪の横幅：高さで表示したのが第2表である。これによると、望月町月輪庵寺の正賀2年塔よりやや下の南北朝期のB（整理番号16—以下同じ）・d（8）を最古として、多くは室町時代から戦国時代にわたるものが多い。そして、日向畑遺跡の墳墓址には、まず五輪塔がつくられ、戦国時代に入る前後に、11・18・7の宝篋印塔がつくられていつたようである。しかしB（16）の位置は、中央より西側の位置にあり、d（8）が中央にあるのに対して不自然である。これらは、地輪の位置が若干移動していることも考えなければならないことを示唆している。

(8) その他の出土遺物

古銭の開元通宝は、かなり長い期間にわたって流通し、唐の乾元重宝等の古いものと伴出している例も多いが、新しいものでは永樂通宝や宣徳通宝等と伴出している例（註7）もある。しかし、寛永通宝と伴出する例は、新潟県中島村と岡山県早島町などの数例に過ぎない。なお伴出したものが私鑄銭と考えられることなどから、室町時代から戦国時代にわたるところと考えて大過あるまい。なお伴出した土器も、すべて内耳土器で坏にやや古い形式もあるが、およそ仏塔の時期と一致する。

以上の考察を総合して、この墳墓址の形成された時期は、南北朝期の14世紀から織豊政権下の16世紀の中ごろまで、200年余にわたっているものと推定できる。23基の火葬骨を伴う墳墓址は、主人と夫人、川西村東昌寺の例のように、更に例

室をも含むとしても、8人およそ8代にわたることになる。1代およそ80年と推計すれば、28基の墳墓址は、240年にわたることになり、仏塔の推定と完全に一致することになる。

3 被埋葬者に対する考察

日向畑遺跡は、真田氏の居館跡と伝承する地籍に接し、真田氏の居城といわれる松尾古城の麓にある等、前述葬制の項で考察した館と墳墓址の関係から、地方武士としての真田氏を以て、その被埋葬者を推定することができない。また、この地籍は、松尾山常福院の廃寺址で、真田氏の菩提所といわれたことは前述のとおりである。そして、ここには真田氏中興の祖といわれる真田一徳斉幸隆16才の姿を写したという木像を安置する安智羅明神があり、真田家よりの祭祀料として、水田1反8畝が与えられ、これが現在の明神田であるという。仏塔の年代から推定した墳墓址の終末期は真田長谷寺に葬られた笑徳院殿月峯良心大庵主・真田幸隆（1518～1574）の前まであり、幸隆以前で南北朝の動乱期以後の真田一族が、ここ日向畑遺跡の墳墓址（註8）に葬られたと考えるのが妥当であろう。従つて、「真田家系図」・「寛政重修諸家譜」・「真武内伝」・「滋野世紀」等の示す「海野小太郎禪正忠幸隆が真田の庄に住し（註9）この時より始めて真田と名乗る」とする説はとることができない。「大塔物語」に福津氏一党として示されている実田・横尾・曲尾は、現真田町の長・横尾・曲尾のおよそ旧一村ぐらゐを支配する地方武士で、実田（真田）氏の日向畑遺跡の墳墓址と曲尾氏の居城や居館と墳墓址の位置関係、仏塔製作の手法が類似し、この地方の葬制を知ることができる。真田氏は、その後しだいに勢力を伸ばし、永享の結城合戦には、村上頼清配下の北信濃武士団の中で、海野十郎、福津小二郎、真田源太、同源五、同源六などと銘記されるほどに成長している。従つて、真田氏は「大塔物語」の示すように、真田町の長地域で形成された地方的武士であり、「真田系図」のいうような幸隆以後の海野氏系豪族ではあり得ない。海野氏との関係は、勢力の伸長に伴つて、婚姻関係を結び、幸隆が「棟綱女系の孫に当る」とする藤沢直枝氏の論究は、史実に近いものと考えられる。（註10）

日向畑遺跡の仏塔は、かなりの部分が失われ、そこに作為を感ずると前述したが、

1 「真田系図」の示す幸隆の記述と矛盾するため、幸隆以前の先祖の事実を抹殺した。

2 天文10年(1541年)の神川合戦に敗退して上州に落ちのびる際に敵軍の眼から先祖の墓を隠した。

3 上記敗戦の際に、武田・村上・諏訪などの敵軍によつて荒された。

しかし、3の場合は仏塔の部分だけが滅失されるだけでなく、墳墓もあばかれる筈であるが、特にそうした事実は認められなかつた。

以上各項にわたつて論述したが、日向畑遺跡の墳墓群は、真田一族に関係するものであることがほぼ間違いない。従つて、「大塔物語」や「永享の結城合戦」等の記述は、およそ事実を伝えるものであり、系図としては「矢沢系図」がこれに近い。なお仏塔についての形式編年は、こうした研究に欠くことができないので、今後の精緻な集成を期待して止まない。(小林)

註1. 小山真夫 「信濃國小泉郡の石造相輪塔」(考古学雑誌19-8)

「信濃における板碑」(考古学雑誌4-1)

註2. 宮下真澄 前掲書

註3. 宮下真澄 「中世墓制の一例について」(信濃19-11)

註4. 信濃史料刊行会「大塔物語・嘉永三年刊本」(信濃史料第7巻)昭和45年

註5. 赤星直忠他「中世の石塔と葬制」(シンポジウム仏教考古学序説)昭和46年雄山閣

註6. 赤星直忠 「やぐら一鎌倉における中世墳墓の様式」(鎌倉市史・考古編)昭和34年吉川弘文館

註7. 矢島恭介 前掲書

註8. 藤沢直枝 「真田氏」(上田市史・上)昭和15年 上田市

註9. 註4に同じ

註10. 藤沢直枝 前掲書

(小林)

日向畑遺跡発掘調査参加者

- | | |
|---------|---|
| 1 調査主体者 | 真田町教育委員会
教育長 清水 憲雄 |
| 2 調査委員 | 清水 利雄 (真田町文化財調査委員)
安藤 裕 (")
遠藤 憲三 (")
久保 達雄 (")
山岸猪久馬 (") |
| 3 発掘担当者 | 川上 元 (上田市立博物館学芸員)
(真田町文化財調査委員)
小林 幹男 (上田染谷丘高等学校教諭) |
| 4 調査補助員 | 児玉 卓文 (国学院大学 学生)
上田染谷丘高校歴史班
地元・角間区の人々 |
| 5 参加者 | 小宮山茂樹・宮下 三男・上野 悦治
高橋 幸恵 (以上 上小考古学研究会員) |
| 6 事務局 | 真田町教育委員会 |
| 7 土地所有者 | 倉島 勇・倉島 忠由 |

VI ま と め

以上、日向畑遺跡発掘調査において認められた遺構・遺物についての記述をのべ、さらに若干の考察を加えたが、それらを要約すると次のようである。

1 本遺跡は、五輪塔と宝篋印塔を墓標としたいわゆる中世の墳墓跡（群集墓）であり、その台石下部に構築された石組みの小ピット内に火葬骨を納骨した。例外的には、宝篋印塔の墓礎部をくりぬいた中に納骨したものもあつた。いずれも骨壺を使用しない埋葬方法であつた。

2 検出された石塔群の形態からみて、本遺構は室町時代（14世紀末～15世紀末）から戦国時代（15世紀～16世紀末）にかけてのもつと推定される。

8 最後に、本墳墓跡の被埋葬者はいつたい誰であつたかということであるが、この点については、遺跡周辺の歴史的な背景を検出された石塔群の形態による年代推定さらに伴出遺物による時代の判定等を勘案して問題点にふれなければならない。

この点については、V章に詳述のとおり、真田氏に関係があつたことは、ほぼ確実である。その場合、遺跡の年代推定からみて、すくなくとも真田幸隆以前の真田一族と考えられる。今後、新しい事例をまつてさらに究明したい。

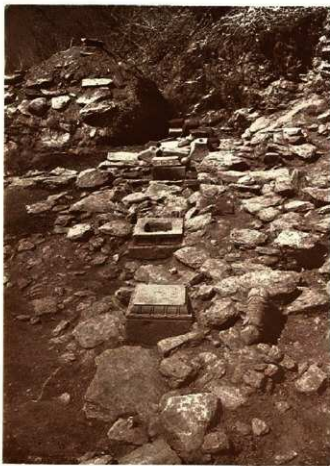
なお、発掘調査後、真田町では本遺跡を史跡公園として整備した。また検出された遺物は真田町教育委員会が保管している。（川上）



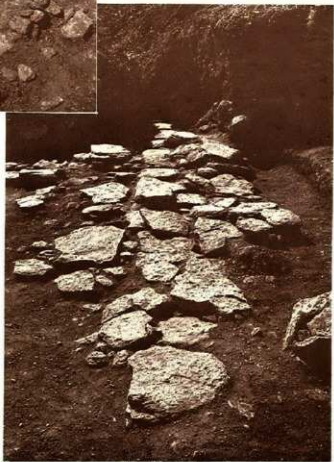
(東方より、背後の山は松尾古城)



(遺跡より南西を望む)



(東側より)



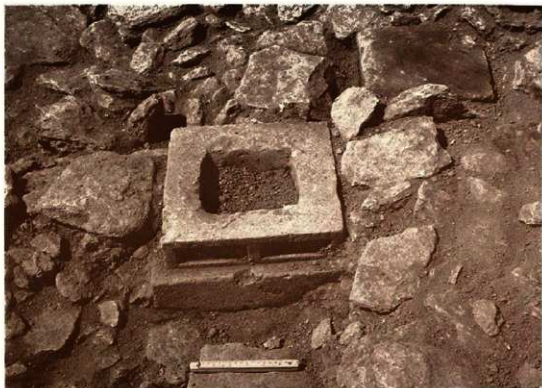
(石造物を取除いた状態・東側より)



(西側より)



(石造物をを取除いた状態・西側より)

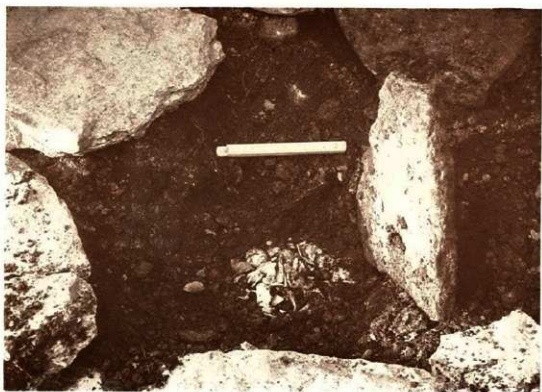
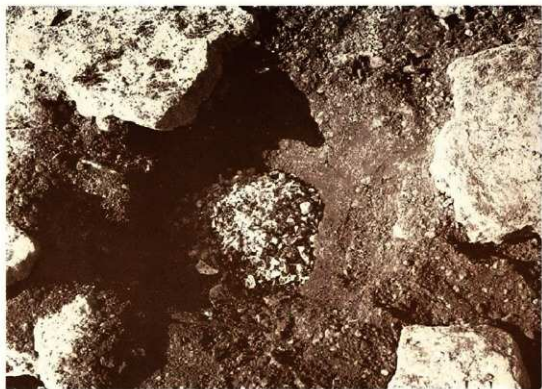


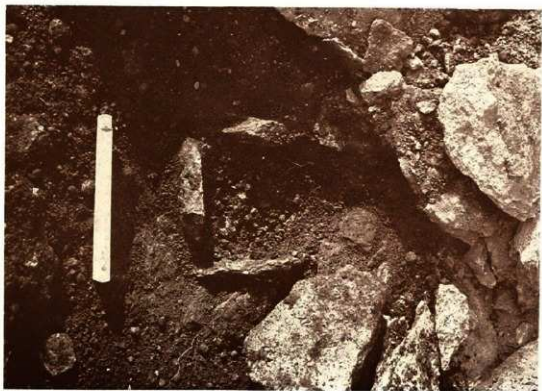
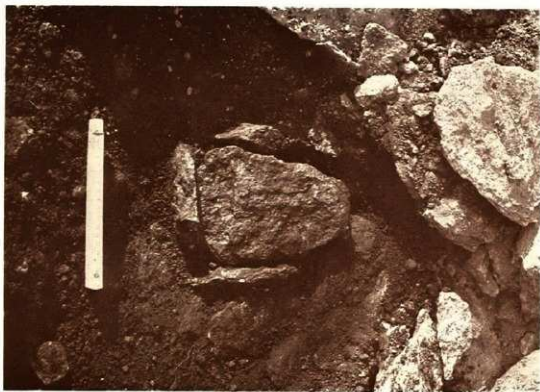
(南側より)



(西側より)

図版五、火葬骨出土状況(一)





(上記の石蓋を取除いたもの)



(墓地へ通ずる石敷遺構)



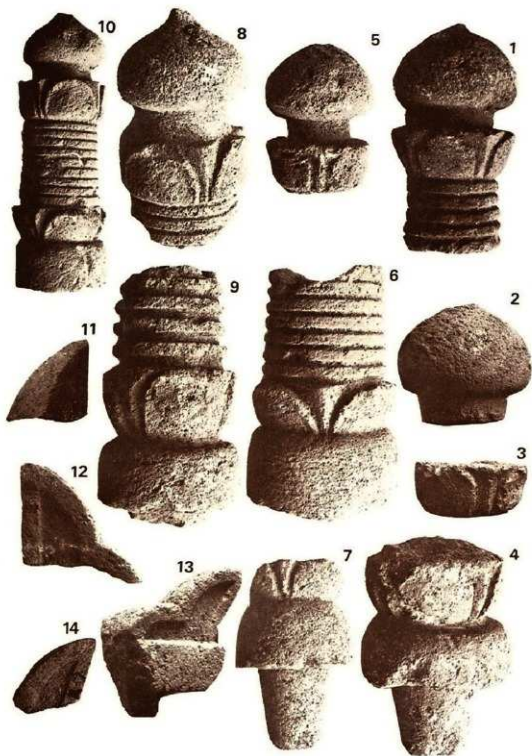
(墓地背後の石垣遺構)



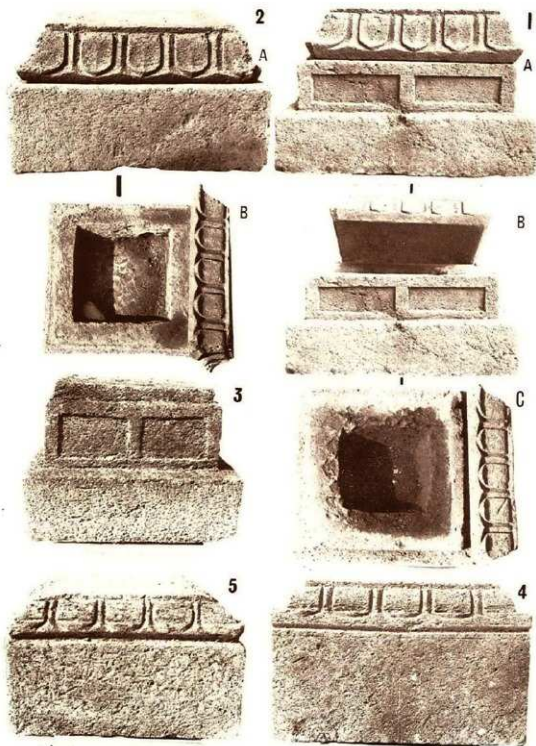
(第1次調査で検出されたものを、もとの位置にもどして撮影・東側より)



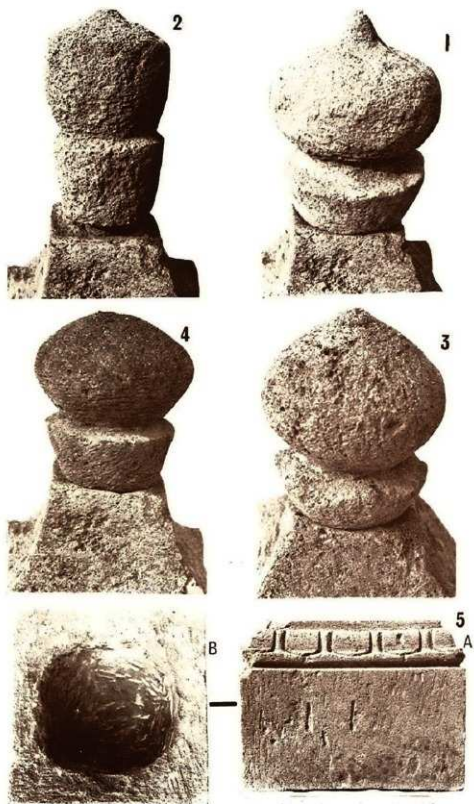
(石道物を取り除いた状態・東側より)



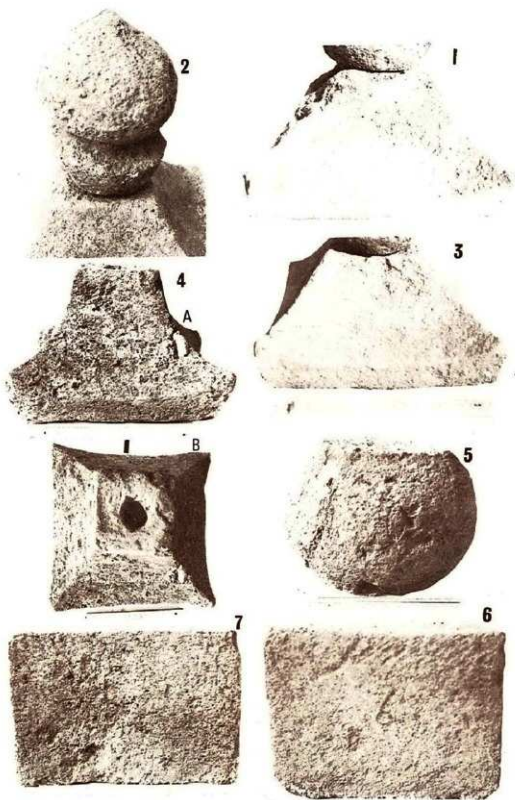
図版 9. 出土遺物 相輪 (1~10)・馬耳形隅飾 (11~14)



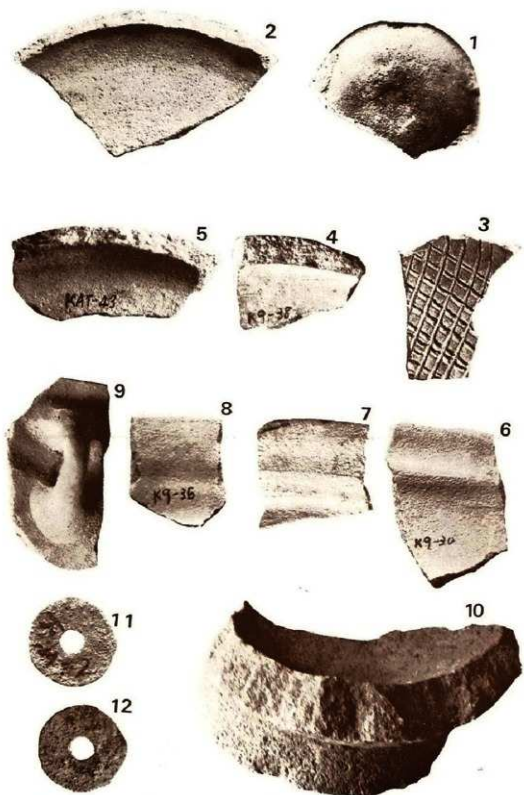
图版10. 出土遗物 宝箧印塔基础 (1~5) 纳骨部 (1-B.C 2-B)



图版11. 出土遺物 五輪塔 風穴輪 (1~4) 宝篋印塔基礎 (5)・B—底部



図版12. 出土遺物 五輪塔 風空輪 (2) 火輪 (1, 3, 4) 水輪 (5) 地輪 (6, 7)



図版13. 出土遺物 土器(1~9)・石皿(10)・古銭(11, 12)



真田町日向城跡発掘報告書

刊行月日 昭和48年5月30日

刊行者 真田町教育委員会

印刷所 上田市 池田印刷

印刷部数 500部



